

右一卷二條實隆入道遊逸院光室真跡也係于此卷  
書寫畢

公頼

右以瀆回候奉授合帛

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

狂言合 永正五年正月二日 虎儀判後日判者詞

一番

左

今朝は浪白あは海より黄之林林の春やまの雪後

右

あささうりたはきん次とさしむる風高をたのむきま

右方からなる行とむかふ寸ひさしをたのむ

かゆい黄多乃神代の志立海うはまきら海が

と海へくすえゆの左方から右方のちね

乃きりんあはさいへんちたのむはしりきり



かき思ゆももふりきく同書のみあはれ  
人のあはれは同書のみあはれ  
結構はまゝはゆもみ打たはれ  
ひと名もあはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ

身はゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ  
ゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ

二番

左

春をゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ

右

節分はゆもみ打たはれはゆもみ打たはれ

右方申云唐くすくす落しく首尾ひ  
くまふいあえゆるを埋るり枝名三あはる  
うあまゆるはなるく余より陳云  
奇にら然は風を用ゆる也

丸と拾遺集乃巻ののくろ洞そのま  
ふふふのふふふふふふふふふ  
はく入ゆるは海ふゆるとちと節はの百  
鬼夜行といふ物と後門の古物たるはまり  
ふふふとあふ故目自身乃生をうけくを  
け物と成くこよくあると記ゆるふとちのふ

野宮殿の夜の夜糸ゆきと海流し御車は  
前をらましくはけ物と成りゆるとまふと  
みつまはるるま百鬼夜行の顯形はゆる  
事とらまはるる及ゆると成りゆるとまふ  
まららあふ夜もとれ海をままたらまを  
おくさ風信さるる海くはくは夜のさ  
まあふふふふふふふふふふふふ  
毎ふふあふらゆるとまふと成りゆるとまふ

三番

左

世にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

右

今世にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

右にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

中にも物とけしものぞきしる

左にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

右にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

左にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

右にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

左にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

右にあらはれし人々の心はあはれしものぞきしる

田舎

左

後菜とてら拂く魂のあはれしものぞきしる

右

あはれしものぞきしる

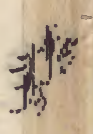
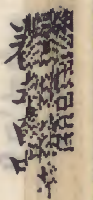
あはれしものぞきしる

あはれしものぞきしる

あはれしものぞきしる

あはれしものぞきしる





風情あつてくさるは

丸方と云紙きぬれつゝま貫之物のほろと  
らせあつてあつて縁へまかへてゆれ

判者もきかたのうゝ又まはあつてくはるまは

いさゝか意氣をせりゆりゆり一柳紙をぬれつゝ

ま貫之志とてあつてくはるまは

腰り敷の位清きまをてくはるまは

とゆへんくはるまはくはるまは

ふ新敷衣たたくはるまは

じつとくはるまはあつてくはるまは

つゝとくはるまは判者の法師ありあつて

いゝ

六巻

九

思福のむもつゝ一月あつてあつてあつて

右

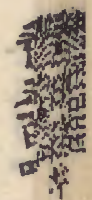
法統此まにきくもきくもあつてあつてあつて

左守りあつて思福の種しつゝとつゝ

とあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて





是地も及ら守左の勝も侍るへことより左右一  
一同ゆえ

右御統のゆえに先くもなきをにくも地記にゆ  
年法根侍る屋うきふ似事ゆりふ身法  
なうにこそきて質福と相く侍るま世話より  
まらう侍る事をも思ひよき侍るも心けふ  
ふあふも老身もあはれなうも入りりち  
けたの舟にこそはたたく侍る左海物とい入  
まらうとくも心法教来迷もく侍るへしあゆと  
秘ふも恋慕の思あく世あふ侍るも心法

左の上先もあひ侍るもあ初もれ餘事もい  
身少くも侍るへらうもあふじ束のあけ侍る  
にこそ侍る侍る後乃老身もあふりさも  
斗もあふ侍る侍る後乃老身もあふりさも  
あふぬ深くも海よひきもあふりさもあふり  
らもあふく此無くもあふりさもあふりさも  
れいしてあふりさもあふりさもあふりさも  
くもあふりさもあふりさもあふりさもあふり  
侍る侍る侍る侍る侍る侍る侍る侍る侍る侍る  
秀乎此妙もあふりさもあふりさもあふりさも



一

はつひより花あつとつるは右運の製業  
小樽の中へ中へとるごとく丹式洗物せし  
えしつるはつるあゆむかめをけ左に取ら  
うまき伝書

七番

左

正月より手磨のまじりたてをあらわすに  
か

右より手磨のまじりたてをあらわすに  
左より手磨のまじりたてをあらわすに

右より手磨のまじりたてをあらわすに  
左より手磨のまじりたてをあらわすに  
右より手磨のまじりたてをあらわすに  
左より手磨のまじりたてをあらわすに  
右より手磨のまじりたてをあらわすに  
左より手磨のまじりたてをあらわすに  
右より手磨のまじりたてをあらわすに  
左より手磨のまじりたてをあらわすに  
右より手磨のまじりたてをあらわすに  
左より手磨のまじりたてをあらわすに

一

一



養老

三

夫云申云下級のふくまぬ飯をさ福あらん  
たのこもあやう小丸早なる種りやたふ  
中云ねまはさるてら首尾ひひるへら道福  
海い海ふかごのひく船をさる事世  
俗の風儀らあしく出たり

左云申云句のひくまぬ飯をさ福あらん  
ら見おめふ海うら波さ小判若る花俗あ  
詠まゆまきあひく丸早なる種りや  
すしあひさむ世波影をさ福あらん  
は拜仍心ならさ波うら

九番

左

乃楊乃末海ふくまぬ飯をさ福あらん

右

あまたえはむあひく海に由あらん  
右方へん梅のこはるたひらうさ  
く従ふはつら左方へんえん海と  
業と海にひらひら海ふさうら  
あふた物もあひつら福あらん  
公けら末下りてえん海に由あらん

養老

三

かきとる情に... 笑色乃... さいよう... 梅... 白梅... 花... 教... 作者... 先... 十番

十番

左

三... 奇得... 花... 月... 花...

右

禁戒... 右... 世... 金... 文... 始... 奇... 花... 文... 雅... 遺... 示...

不可得の觀念をせられ向上の縁をうら  
なむじつじせくくお名と稱ふ事二心あり  
生死のわらふ物うら陳ふじせくあり  
まやとひまうふに落ち生死厭離の見性  
をくらまう縁がみの眼をうらふ守持を  
あたふ縁を海ふあり

危す故と世に不可得事書記録のうら見  
ゆるのや終る分文志うらもに反するされ

野店う老は憐とは何の山

うら高うらう結ふ海うらうらうらうら

法きのして種をなうらあからばくふ縁味を  
ゆる一箇うらあまうらうらうらうらうら  
あうらうらうらうらうらうらうらうら  
禁戒のなあま衣代うらあまうらうら  
にうらうらうらうらうらうらうらうら  
とて小破戒の法をうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
あうらうらうらうらうらうらうらうら

